

■ バングラデシュの就学前教育の現状と課題 — 持続可能な開発目標（SDGs）の4.2を踏まえて —

Current Status and Issues of Pre-primary School Education in Bangladesh: — Based on Target4.2 of the Sustainable Development Goals (SDGs) —

山 村 けい子*
(令和2年1月29日受理)

要約

2000年のミレニアム開発目標（MDGs：Millennium Development Goals）を経て、2015年には持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）が国連において採択された。MDGsにおいては、教育、母子保健等、アフリカの一部の地域など、まだ目標を達成されず課題が残された。SDGsは「誰一人取り残さない」をスローガンにあらゆる形態の貧困をなくし、不平等や気候変動の対処をし、2030年までに持続可能な社会を目指すこととなった。MDGsでは、開発途上国支援を主とし、ずいぶん進んで来たが、まだ開発途上国で暮らす子ども達は、貧困のために十分に「教育」が受けることができないのが現状である。実際にバングラデシュの小学校にある「ナースリークラス」を調査し、バングラデシュの現状と課題を探り、日本の保育との違いから、就学前の子ども達に「本当に必要な教育とは何か」を現在の日本の「就学前教育」を批判的に検証し、「就学前教育」の役割を改めて明らかにしたい。

キーワード：SDGs4.2、開発途上国、就学前教育

keywords：SDGs4.2, Developing country, Pre-primary school education

1. はじめに

昨今、日本においても、貧困問題がよく取り上げられるが、世界においてはやはり多くは開発途上国（以下途上国）においての問題が大きい。特に中でも子ども、女性の問題が切実である。そのため教育を受ける機会も得ることができずにいる。この状況を少しでも改善するために様々な努力が国際社会でも行われてきた。

途上国の多くは、質、公平性、財政等の多くの深刻な問題を抱えており、そこのどれかを選んで教育に繋げていくのは容易な問題ではない。

「黒田2009（平成21）年に『開発のための教育』、『教育の開発・発展』、『教育と開発』¹⁾』という3つの視点について述べている。その中の1つである「教育を基本的な人権ととらえることで、教育それ自体に普遍的な価値がある」と考え、こうした視点は、性別、年齢、人種、出自などとらわれ

ず、公平な教育機会へのアクセスをすべての人に保障するという理想を掲げた『世界人権宣言』（1946）や『子どもの権利条約』（1989）などの国際的な合意に基礎を見ることができるとある¹⁾』とあるが、この点に重点を置き考えていきたいと思う。

これらの視点は、今後日本と途上国のバングラデシュの就学前教育の比較をしながらどこに課題があるかなどを探るにあたっても重要な視点となる。

1990年、世界中の国家や社会においてすべての等しく、基礎的な教育を受ける機会を保障されなければならないことに合意した国際的な目標であるタイのジョムティエンで開催された「万人のための教育世界会議」の中で「すべての人に教育を（EFA：Education for All）」というスローガンを掲げられた。2000年4月、「ダカール行動枠組み」において「われわれ世界教育フォーラムの参加者

(*やまむらけいこ 保育科講師 幼児教育学・保育学)

一同はあらゆる市民ならびに社会のために『万人のための教育 (EFA)』目標を達成するために尽力することを約束する」と共同宣言し、「われわれは『万人のための教育宣言』(ジヨムティエン、1990年)の方針を再確認している」というこの方針は「世界人権宣言」と「子どもの権利条約」に基づいており、すべての子どもたちや若者、成人が、教育を受けることによって得られる利益を得る権利を持っているという考え方である。ユネスコの「21世紀教育国際委員会」が、1996年に作成した報告書「学習：秘められた宝」(Learning: The Treasure Within)の中で定義した、学習の4本柱として「教育」とは、「知ることを学ぶ」、「為すことを学ぶ」「共に生きることを学ぶ」、「人間として生きることを学ぶ」という人間の学習の必要性を最も善くかつ最大限の意味において満たすことである。教育こそが一人ひとりの才能や生まれ持っている能力を見出し、学習者の個性を創り出すのではないか。そうなることにより、生活も社会もより良くなるのであろう。そして共同で目標の達成を公約とし、6つの中の1つとして「最も恵まれない子供達に特に配慮を行った総合的な就学前保育・教育の拡大及び改善を図ること」なのである。

先進国と同様に途上国においても「乳幼児のケアと教育 (ECCE: Early Childhood Care and Education)」に関する様々な取り組みが行われている。その後、2000年のミレニアム開発目標 (MDGs: Millennium Development Goals)を経て、2015年には持続可能な開発目標 (SDGs: Sustainable Development Goals) が国連において採択された。この中には、目標4として「すべての人が公平に受けられる質の高い教育の完全普及と、生涯にわたって学習できる機会の向上」が掲げられている。そして問題点をより具体的にし、課題解決の方法を探るために新たにターゲットとして4.2「2030年までに、すべての子どもが男女区別なく質の高い早期幼児の開発、ケア、および就学前教育にアクセスすることにより初等教育を受ける準備が整うようにする」を設定した。

先行研究において門松2016 (平成28) 年は、「バ

ングラデシュでも、ECCEの一環である就学前教育の普遍化を目指し様々な政策が採られてきており、2010年国家教育政策 (National Education Policy 2010) では、5歳児への1年間の就学前教育を学校教育の初段階として導入することが明記され、2011年には就学前教育段階のナショナルカリキュラムが制定された。」²⁾と述べている。バングラデシュにおける就学前教育の運営としては2点の特徴的な点があり、1点目は、主に既存の小学校の1つの教室として就学前教育が行われている。2点目は多様な機関、例えば幼稚園などを通して就学前教育が行われていることである。

バングラデシュでは14種類の初等学校類型がある。2014 (平成26) 年には、その全てに就学前教育が導入されている。そのなかでも特に、2012 (平成24) 年に政府が作成した就学前教育拡大計画 (Pre Primary Education Expansion Plan 2012) では、政府、NGO、私立機関の3つのアクターが就学前教育を広げることが主となっている。

バングラデシュには、就学前教育を行う機関は2つあり、1つ目は、小学校内にある「ナースリークラス」、2つ目は、K G スクール (Kindergarten School) であり、伝統的に就学前教育を提供する私立機関として扱われているのである。

今世紀様々な大きな課題がある「持続可能な開発のための社会」の実現するために「教育」がどのような役割をすることができるのであろうか。「持続可能な開発のための教育 (ESD: Education For Sustainable Development)」、「市民性の教育 (citizenship education)」いう2つの点も、途上国における教育の中で「就学前教育の役割」について明らかにしていきたい。

また、その就学前教育が必要とされている現代においてどのような保育内容が子ども達の成長・発達にとって重要であるかということも改めて考察をしていく。

2. 研究目的

2000 (平成12) 年、世界フォーラムで採択された「ダカール行動枠組み」の6つの目標の達成の公約から「最も恵まれない子供達に特に配慮を

行った総合的な就学前保育・教育の拡大及び改善を図ること」と言われている。また、途上国においても乳幼児のケアと教育 (ECCE) に関する様々な取り組みが行われている。その後、2000年のミレニアム開発目標 (MDGs) を経て、2015年には持続可能な開発目標 (SDGs) が国連において採択された。この中には、目標4「すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の促進する」という教育目標がある。

「世界幼児教育・保育機構 (OMEP)」においてはターゲットを4.7においていた。しかし、バングラデシュの就学前教育ばかりでなく日本においては、2018 (平成30) 年から保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領保育が改定され、「幼児教育」の積極的な位置づけとされた。そこで「就学前教育」をより充実するために SDGs (持続可能な開発目標) のターゲット4.2の「2030年までに、すべての子どもが男女区別なく質の高い早期幼児の開発、ケア、および就学前教育にアクセスすることにより初等教育を受ける準備が整うようにする」をとりあげた。

就学前教育が必要とされている現代においてどのような保育内容が子ども達の成長・発達にとって重要であるかということを改めて考えていくことが未来の社会を担う子ども達には不可欠である。「持続可能な開発のための教育 (Education For Sustainable Development: ESD)」、「市民性の教育 (citizenship education)」いう2点については就学前教育の基盤とし、途上国における教育のなかでも「就学前教育の役割」について考察をしていきたい。

3. 研究方法

本研究はバングラデシュを対象とし調査を行った。

(1) ダッカ、ナワジゴンジ、コミラの Primary School にあるナースリークラスを調査した。

(2) 期間：1回目…2018年1月12日～16日
2回目…2018年7月14日～21日

(3) 対象小学校：

- 1回目…私立小学校 (ダッカ)
公立小学校 (ナワブゴンジ)
- 2回目…公立小学校 (コミラ)
公立小学校 (ナワブゴンジ)
半官半民小学校 (ナワブゴンジ)

(4) 内容：①就学年齢、保育、教育内容、方法、給食等の実態調査をする。
②公立私立の違いを調査する。

4. バングラデシュでの実態調査結果

バングラデシュには、今年 (2018年) には2回調査するために訪れた。K G スクールもあるが、今回は小学校に併設されている「ナースリークラス」を訪問した。

(1) ダッカ

【2018年1月12日～16日】

◎1月13日

・私立小学校 (Kutubbag Preparatory School)

その中の「ナースリークラス」を訪問したが、クラスは1クラスのみであった。机と椅子に3人掛けで座っており、5歳児の子ども数18名 (女児3名) であった。保育料は、無料である。



写真1) 私立小学校 (ダッカ)

事例 1

初めての訪問だったが部屋に入った時、明るい表情で迎え入れてくれた。初めに名前を伝えた。みんな口々に「KEIKO, KEIKO」と言っていた。かえるの手袋人形を使って手遊びをするところんでいた。次に「グー、チョキ、パーでなにつくろう」を日本語とベンガル語で歌った。手でグーの形をしながら「グー」というと「グー」とおうむ返しに行ってきた。チョキもパーも同じようにした。そして歌を歌いながら手遊びをした。慣れてきたころに男児と女児一人ずつ前に出てきてもらい、一緒にした。子ども達は楽しそうにしていた。

保育内容を担任の先生から聞いたが、遊びは、一切なく政府から支給された「教科書」でベンガル語の学習をしている。教室（保育室）は、机とイスのみで壁に絵や、また絵本、遊具等はない。



写真2) ナースリークラス (ダッカ)



写真3) 筆者と手遊びをしているところ

この学校では給食は支給されていなかった。保育時間は、10時から12時ころまでである。担任の先生は、資格はなく、1人担任である。2～3人の先生が手伝っていた。あまり時間がなく1日の保育の流れは聞くことができなかった。

カリキュラムの内容についての先行研究はあるが、一日の生活の流れのような詳しい調査の先行研究はなかった。

◎ 1月14日

ナワブゴンジに移動をする。ダッカからはおよそ車で2時間はかかる。

ダッカに比べると自然が多く、車も少なく、道も舗装はされていないが、静かな地域である。

公立小学校、2か所訪問をした。

① 1ヶ所目

a. ナワブゴンジ

・公立小学校 (Government Primary School)

男女約30名だが、男女15名が1月に入学してきた。年齢は4、5歳児の混合クラスである。午前9時～12時まででダッカの私立小学校のナースリークラス同様に給食はなかった。「BOOK / Tibbin」という授業が午後1時30分～2時までである。ベンガル語の授業もあった。最初は手遊びをして気持ちをほぐし、子ども達の中へ入っていった。



写真4) 公立小学校



写真5) 手遊び (ゲー、チョコキ、パーで何つくろう)

表1) 保育内容 (1日の遊び)

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ゲーム ・PLAYING ・子どもの詩の暗唱 ・歌 ・ベンガル語の授業 |
|--|

表2) 年間行事

- | |
|---|
| <p>1月…ピクニック・スポーツデイ
 2月…クラススタート
 ナショナルデイ (母国語の日) Shahid, Dibosh
 3月…26日独立記念日
 4月
 5月…サマーバケーション summer vacaition
 6月…イード
 7月
 8月…15日 National Mourning Day 写生大会
 25日ヒンドゥー教
 9月…イスラム教
 10月…テスト
 11月…テスト・TEA (ナースリークラスは無し)
 12月…テスト</p> |
|---|



写真6) ダンス

②2ヶ所目

b. ナワブゴンジ

・公立小学校 (Government Primary School)

男女約30名で年齢は、3歳児～5歳児の混合クラスであった。数名の保護者が一緒に参加していた。机はなく床に座って一緒に手遊びなどをして遊んだ。他の学校でもそうであったが、手遊びは言葉があまり通じなくても楽しんでいた。時間的に遊び等がわった後だったので保育を見学できなかった。担任は、1人だった。時間の都合であまり長くは滞在できなかった。壁面装飾には英語とベンガル語が書かれていた。



写真7) 床に座って過ごす



写真8) 壁にはローマ字

【2018年7月14日～21日（バングラデシュ2回目）】

① 1ヶ所目

a. コミラ

ここには、ONEDROP 教育支援の会が現地の人と協力をして建てたマジェンダー・ワンドロップ小学校がある。そこを見学した後、コミラの公立小学校を訪問した。

・公立小学校

(Rataopur Government Primary School)

男女25名であった。一人担任であるが、補助に数名入っていた。小学校の校長先生は、「Head master」と呼ばれている。保育は10時から12時まででこども給食はない。保育室は明るく壁面装飾もカラフルである。

天井からも装飾がされていた小学校の方では、朝の集会をしていた。



写真9) ダンスの前



写真10) ダンスをする子ども達

表3) カリキュラム

* 3) 筆者作成

1. National anthem Number (1~20)
2. Playing
3. Drawing
4. Excise
5. Songs
6. Acting
7. Study
8. Science ICT
9. Bengali Alphabet English Alphabet

② 2ヶ所目

b. ナワブゴンジ

・半官半民小学校

(Bordonpara government primary school)

男女約30人のクラスで女児も多かった。

保育時間は10～11時までで、こども給食はなかった。

初めに子ども達から自主的に話をしていて、内容まではわからなかったが、先生とのやり取りを楽しんでいた。

その後、カードあそびをしていた。(絵と数字)担任の先生は、教員免許を持っており半年間研修を受けていた。

この地区のモデル校になっており、校長先生からは「楽しい授業」を心がけているということであった。



写真11) カードを使って数字を学ぶ

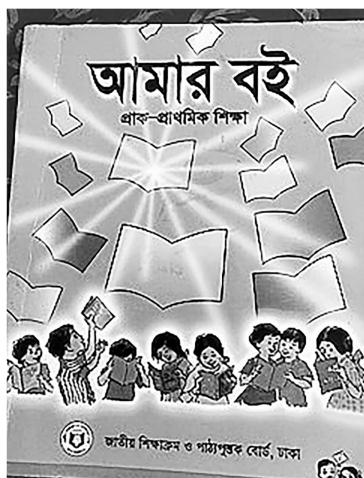


写真12) ベンガル語・算数の教科書

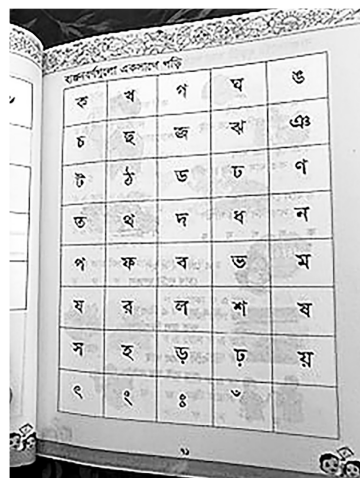


写真13) ベンガル語・算数の教科書



写真14) 子ども達が自分たちで考えたことを発表する。



写真15) 数字のカード

5. 考察

(1) 日本との比較

まず日本の幼稚園、保育所等からの違いから比較していくことにするが、実態調査に行ったところは、小学校の中にある「ナースリークラス」のみであるので、幼児クラスに関しての違いについて述べることにする。

1) 制度

実態調査から簡単にまとめたのが以下のとおりである。

表4) 就学線教育の制度

表4) は筆者作成

	バングラデシュ	日本
管 轄	初等大衆教育省	文部科学省／厚生労働省／内閣府
就 学 率	40.4% (2013)	89.1% (2011)* 1)
対 象 年 齢	3 歳児～5 歳児	3 歳児～就学前
人 数	男女混合で30～60人	3 歳児は1 クラス概ね20人 4、5 歳児は1 クラス概ね30人
形 態	3 歳児～5 歳児まで全員同じクラス	年齢別が多いが、縦割り保育もしている。
授 業 形 式	教師主導型	子どもが主体
給 食	なし	・幼稚園では、毎日ではないが弁当や給食もある。 ・保育所は給食がある。
保 育 内 容	8 領域	5 領域
教 員 数	校長1名教員約2～5名	園長・所長1名教職員3名～6名
教職員資格	無資格の教員も多い	幼稚園教諭・保育士資格

就学前以降の教育制度は次の図1) である。

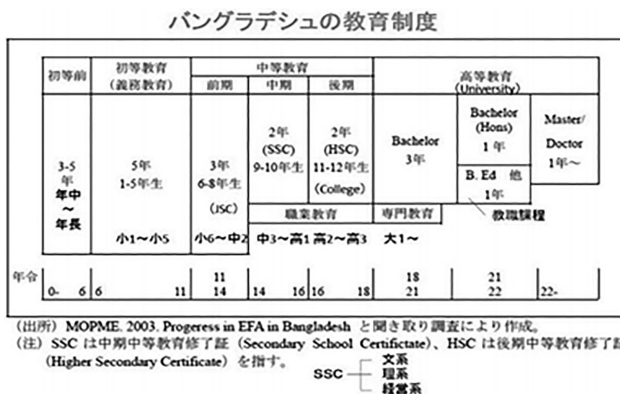


図1) バングラデシュの教育制度

2) 保育内容

環境構成については、日本は、ブロック、ままごと、積み木等の遊具が自分たちで使える位置に準備されていることが多い。バングラデシュは、写真にもあるように壁に絵や文字が書かれてあったり、ポスターが張ってあったりした。

日本でも壁に装飾をしたり、ポスターを張り、季節感もあり、多くは子どもの作品が使われている。

手遊びをした後に手作り人形で遊んだが、楽しそうに一生懸命真似をしようとしており、絵本「はらぺこあおむし」(英語版)を読んだが、英語はま

だわかりにくい様子だったが、時折ベンガル語も交えて読んでみた。よく見ていた印象であった。

保育内容は、幼児教育においては5つの領域に分かれており「健康、人間関係、環境、言葉、表現」である。その中では、生活習慣、体操等、描画、制作、ごっこ遊び、音楽あそび、園外保育、多文化、地域とのつながり、動植物に触れる等の遊びが発達を保障したうえで展開されている。

バングラデシュにおいても一番大きな違いは、教科書を中心に保育をしていることであった。公立や私立での保育内容は独自性が強かったが、特にダッカの私立のナースリークラスは、遊びの保育はなく、読み書き、算数等の保育より授業に近かった。公立に関しては、独自性もあるが、遊びや詩の朗読、描画などを取入れ、いずれの公立も同じような保育がされていた。

これは、バングラデシュの就学前教育に対する考えの違いの大きな点でもある。なぜこのような違いがあるのかは、後で述べてみたいと思う。

3) 学校の種別

今回調査をしたバングラデシュの小学校は、公立、私立、半官半民の小学校であった。初等学校類型においては前述したが、1点目は、小学校の1教室として就学前教育が行われており、2点目は多様な機関において就学前教育が行われている。小学校に関しては、管轄は違うがイスラム教の宗教学校として代表的な「マドラサ」も含まれる。バングラデシュでは14種類の初等学校類型があるが、2014（平成26）年時点で、その全ての類型に就学前教育が導入されている。その中に初等学校類型としては、1つは、K G スクール（Kindergarten School）がある。就学前教育を提供する私立機関の代表格としているK G スクールは、「Kindergarten」で就学前教育だけでなく、初等教育も提供する初等学校類型の1つである。もう1つは、非登録非政府立小学校の類型であり、2010（平成22）年以降は、類型でも就学前教育を行っている。これらのことも前述したとおりである。

実態調査においては、K G スクールではなく小

学校の1つの教室としての「ナースリークラス」の就学前教育だけである。

4) 教職員の資格

日本では、幼稚園教諭免許、保育士資格を取得した教職員が、保育を行っている。2003（平成15）年無認可保育所で子どもに対する事故が続き、保育士に関しては「国家資格」となった背景がある。バングラデシュでは、半官半民の小学校の「ナースリークラス」の教員は、資格もあり、研修も受けていた。他のところは、不明だった。これは、バングラデシュにおいても課題となっており、資格を取得することは、重要であると考えられている。

5) 保護者について

途上国であり、貧困の問題が大きく影響をしている。少しずつ国が対策を考えて取り組んでいるが、子どもの保護者が、就学前教育を受けていない保護者が多いので就学前教育に対する意識が低いこともあるが、低年齢児でも家庭においては稼ぎ手であると考えられる。

6. 総合考察

まず「子どもたち」に関しては、日本やバングラデシュであっても可愛さや素直さは変わらない。手遊びや絵本を読んだりしたが、一生懸命真似をしようとしたり、熱心に絵本を見ていた姿から伺える。しかし開発途上国、あるいは最近までは最貧国と言われていたので「貧困」が子ども達にもたらす影響は大きい。貧困については前述をしたが、ダガール行動枠の中でも「最も恵まれない子供達に特に配慮を行った総合的な就学前保育・教育の拡大及び改善を図ること」に関しては、バングラデシュにおいては改善されつつある。門松2015（平成27）年は、「2000年以降、5～6歳児に対する就学前教育が急速に整備されてきた。バングラデシュで就学前教育を提供する機関は、政府機関である初等大衆教育省（Ministry of Primary and Mass Education）、NGO、私立機関1の主に三者である。2014年時点では5～6歳児

向けの就学前教育が無償教育とされており、就学前教育就学率は、40.4%（2013年）となっている。提供状況を施設・学校数から整理すると、初等大衆教育省管轄下では、初等学校の一教室として就学前教育を提供する教室が設けられている。」²⁾とバングラデシュでの就学前教育の急成長を述べている。

バングラデシュ政府、NGO、私立機関が就学前教育を行うなかで、政府は、国としての基準を実践のレベルで定めようとしている。2011（平成23）年にはナショナルカリキュラムや共通の教材が制定された。2012（平成24）年に策定された就学前教育拡大計画（Pre-Primary Education Expansion Plan）では、政府も NGO も含む多様な提供する機関が共通して目指すべき基準（以下、提供基準）を設定した。ナショナルカリキュラム、共通の教材、提供基準が揃うことで国が定めた就学前教育に関する基準の全体像が明らかになった。これら3つを国家基準と総称しているとされている。

今回調査したナースリークラスは、1ヶ所だけが私立機関で後は公立であった。政府が改善をしようとする様子も現地へ行くことにより理解ができた。しかし、日本と比べるとまだ就学率は半分であるので今後も就学するにあたっての課題は、まだ時間がかかると思われる。バングラデシュの教育を支えているのは、政府だけではなく、民間

組織である NPO 力も大きい。先行研究の中で数字でも証明されている。

「就学前教育」をより充実するために SDGs（持続可能な開発目標）のターゲット4.2の「2030年までに、すべての子どもが男女区別なく質の高い早期幼児の開発、ケア、および就学前教育にアクセスすることにより初等教育を受ける準備が整うようにする」とある。SDGsの前には、2000（平成12）年～2014（平成26）年までのMDGs「ミレニアム開発目標」があり、主に「世代内の公正」への関心が高く、途上国を中心に資源や援助が十分でないことを課題としてきた。2015（平成27）年に採択されたSDGs「持続可能な開発目標」は、「世代内、世代間」のバランスを考え、資源や援助へのアクセスも考えつつ、その「質」を高めることの重要性が言われている。

環境構成においては、かなりの違いがみられた。まず「遊具」がなかった。遊具を準備しておくことが環境構成の一つと考えている日本にとっては、バングラデシュの遊具のない環境構成は、意外であった。おそらく貧困が物的環境にも影響を与えてはいるのだろう。

バングラデシュでは、2011年に就学前教育のナショナルカリキュラムが制定され、カリキュラムの内容は、以下のとおりである。

表5) バングラデシュの就学前教育ナショナルカリキュラムの基準

* 2) (ナショナルカリキュラムをもとに門松2017（平成29）年分類・作成。)

発達領域	共通する項目	バングラデシュナショナルカリキュラム	
		該当基準のない項目	独自基準のある項目
身体的発達と健康	粗大・微細運動、健康、個人のケアと衛生	——	感覚器官、安全な生活
社会性と情動	大人・友人との関係、向社会行動、自我と自己コントロール、情動表現、多様性理解	多様性理解	愛国心
認知と一般知識	算数、因果関係、測定、分類、曜日と月の名称	測定、12ヵ月の名称	機器、季節の名称（20までの数概念）※
言語的発達	読む、話す、音と文字の理解、書く	——	絵を描く、（文字・簡単な単語・名前を書く）※
学習へのアプローチ	忍耐、創造性、計画と実行	忍耐、創造性、計画と実行	——

では「遊具」のない環境構成が乳幼児にどれくらいの影響を与えているのだろうか。

就学前教育が必要とされている現代においてどのような保育内容が子ども達の成長・発達にとって重要であるかということを改めて考えていくことが未来の社会を担う子ども達には不可欠であるとするのならば、「遊具」の必要性ということも子ども達の成長発達にどのように役立っているのかを検証する必要がある。

日本では当たり前のように使用している「遊具」ではあるが、バングラデシュのようにいわゆる途上国と言われている国の就学前教育を研究することにより日本の就学前教育の保育内容を改めて考える重要な課題ではないだろうか。

また、日本の就学前教育とバングラデシュ就学前教育のあり方の比較をするにあたって「近代化論」、「従属理論」ということにも触れる必要性がある。「近代化」の就学前教育を批判的に思考することなく、バングラデシュの途上国に導入をしてよいのだろうか。「近代化論」、「従属理論」に関しては、黒田（2009）が指摘している。

次にバングラデシュの「Early Childhood Education in Bangladesh」[Bangladesh Education Article]（2000）はどうだろうか。ダカール行動枠組み、Education for All（EFA）についても書かれている。「Early Childhood Education（ECE） in Bangladesh」においても健康、発達が重要であると言及しているが、現実には、読み書き、算数教育であり、まだまだ大きな課題はある。

このことに関しては、貧困を改善していくことは必至であるのは理解でき、SDGs4.2で改善できる政府の援助が必要である。門松2016（平成28）年「統一的な国家基準が制定されている一方で、バングラデシュの就学前教育では、政府がNGOとの協働を前提としている点が大きな特徴である。バングラデシュは、NGO 大国と呼ばれるほどにNGOの影響力が強い国であり、就学前教育が1つの要素として含まれる乳幼児の発達（ECD：Early Childhood Development）6の分野でも、Bangladesh ECD Network（以下、BEN）という政府とNGOがともに所属し、協働する

フォーラムがある²⁾と述べている。バングラデシュにおいては多くの他国に限らず自国のNPOも活動しており、かなり援助をしているが、追いつかないのが現状である。筆者もバングラデシュの現地の人と協力して小学校建設のボランティアに所属しているが、子ども達の貧困を改善することよりも「教育」の必要性を子ども達、保護者に十分な理解をしてもらいできる限り学校教育を受け高等教育まで進学できたら賃金の高い職業につき、貧困から抜け出し、次世代へと続くことができる。

就学前教育が今回の実態調査だけでは十分とは言えないが、「遊び」のみならずベンガル語、英語、算数など学習面中心で授業形式になるのはなぜであるのかを掘り下げ行くことが必要である。

ターゲットとして4.2「2030年までに、すべての子どもが男女区別なく質の高い早期幼児の開発、ケア、および就学前教育にアクセスすることにより初等教育を受ける準備が整うようにする」という点で授業形式であるバングラデシュは、初等教育の準備であると言えそうだが、その「保育形態」の捉え方である。日本では、小学校へ行くまでに幼稚園教育要領、保育所保育指針等においては、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として「10の姿」をあげている。この中にも「数字・文字・図形」に関する項目はあるが、それらをいかに「遊び」に落とし込み「主体性」をもって学び取れるかである。

バングラデシュは、「文化」を大切にしている。就学前に読み書きをするのは、少し議論になるとしても「ベンガル語」を大切にしている。「母語」を敬う日も年間計画の中にある。ナショナルデイ（母国語の日）である。日本にはないのでバングラデシュの就学前教育の特徴の一つと言えるだろう。

そしてこの「ナショナルデイ」を祝うことは、「市民性（シチズンシップ）教育」にもつながる。

ユネスコは、ESDとグローバル・シチズンシップ教育をターゲット4.7「2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の

推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする」において2本の柱としている。この2本柱は、途上国に限らず、すべての国の教育に必要であると言えることだろう。

そして今回バングラデシュの就学前教育に関しての実態調査では、ターゲット4.2の「2030年までに、すべての子どもが男女区別なく質の高い早期幼児の開発、ケア、および就学前教育にアクセスすることにより初等教育を受ける準備が整うようにする」を観点においている。随分、就学前教育の就学率も高くなっては来ているが、まだ現地点でも大きな課題であると言えるのではないだろうか。就学率ももちろんだが、前述した就学前の子ども達を教育する教員の「資格」の問題も大きな課題である。そして「給食」の問題もある。給食まで提供することは、財政の問題なのか、また習慣として提供をしないのかを今後明らかにしていきたい。

今回行った時期にも関係をしているとは思いますが、「行くのが嫌だ」と泣いている子どもは一人も見かけなかった。子ども達は、楽しそうにしている様子がうかがえた。これは、カリキュラムの内容、教員との人間関係、子ども同士の人間関係、色々なことが理由として挙げられる。このことは、就学前教育に関しては人間関係を形成する最初であり、最も重要な時期であるので、日本の教育もこの点においては改めて見直す必要がある。

就学前教育が、バングラデシュにおいても随分普及をしてきたことは先に述べたが、やはり貧困問題は子ども達の教育には大きな影響を及ぼしている。

貧困は決して恥じることではないが、生活をしていく上で、幼い子どもにとっては不自由で辛いことも多いと思われる。しかし、貧困の生活においても子ども達が、生き生きとして日々暮らしているのであれば、バングラデシュの子ども達にとって「就学前教育の必要性」や「保護者の意識」について考える必要がある。先行研究の中で

「保護者の意識」について述べられているが、バングラデシュの保護全体としての意識としてとらえるには、現場に行って豊かでない生活を目の当たりにした経験上、もう少し調査範囲を広げたものを参考にしたい。生活にゆとりのない保護者の立場に立つと子どもに「教育」を受けさせるより「日々の生活」が優先されるのは、「意識の低さ」だけと決めつけられないだろう。

しかし、貧困に課題があっても子ども達全てが「教育を受ける権利」が保証されているのである。

バングラデシュの現状の課題が就学率等において日本と違いがあるとしても「質の高い早期幼児の開発、ケア」を考えるとやはり「教育」あるいは「保育」の役割は大きいとこの調査からなおさら役割の重要性が深まった。

就学前の子ども達にとって「教育」とは何か。どのようにして「開発」「ケア」を「教育」として子ども達に保証していくのか。

バングラデシュの課題から日本の教育の課題も少し見えてきたように思われる。

「教育の役割とは何か」を探求していくとおのずから子ども達に必要な「保育内容」がわかってくるようになると思われる。

バングラデシュにおける「教育とは何か」ということを研究すると同時に日本においても「教育とは何か」について研究を深めていくことにより「就学前教育」の必要性が明らかになり、ターゲット4.2の「2030年までに、すべての子どもが男女区別なく質の高い早期幼児の開発、ケア、および就学前教育にアクセスすることにより初等教育を受ける準備が整うようにする」の目標に近づけるのではないだろうか。

本研究の次の課題として「教育の役割とは何か」を取り上げ明らかにしていきたい。

〈脚注〉

- * 1) 文部科学省の統計を参照するが、認定こども園は含まない
- * 2) 括弧内はバングラデシュで追加される基準ではなく、書く能力・数概念の能力に関する基準を比較するため記した。門松愛『バング

ラデシュにおける就学前教育カリキュラムの比較分析 ―乳幼児のための学習発達基準の妥当性に着目して―』2017年3月 京都大学大学院教育学研究科紀要 p518

〈引用文献〉

- 1) 北村友人著『国際教育開発の研究射程』2015年5月 東信堂 p4
- 2) 門松愛著『バングラデシュの就学前教育における私立機関の展開』2016年3月 京都大学大学院教育学研究科紀要 p211

〈参考文献〉

1. 北村友人著『国際教育開発の研究射程』2015年5月 東信堂
2. 北村友人 佐藤真久 佐藤学著『SDGs時代の教育すべてにお人に質の高い学びの機会を』2019年4月 学文社
3. David P.Weikart 著『幼児教育への国際的視座』2015年1月 東信堂
4. 門松愛著『バングラデシュの就学前教育における私立機関の展開』2016年3月 京都大学大学院教育学研究科紀要
5. 門松愛著『バングラデシュの就学前教育における政府－NGOの協働構想 ―実践計画と国家基準に着目して―』2015年3月 京都大学大学院教育学研究科紀要
6. 門松愛著『バングラデシュの就学前教育における私立機関の展開 ―K Gスクールの多様性に着目して―』2016年3月 京都大学大学院教育学研究科紀要
7. 大橋正明他編著『バングラデシュを知るための66章』2017年10月 明石書店
8. Early Childhood Education in Bangladesh 『Bangladesh Education Article』2000年 ASAD-UZ-ZAMAN ASAD

